

⑤ 本橋哲也 著

『映画で入門カルチュラル・スタディーズ』  
(大修館書店)

今夏、映画でもいよいよ終幕を迎えるハリウッド・ポッター・シリーズ。イギリスが舞台のこの作品は、当然のことながら、全編にわたり英国色があふれています：石造りの重々しい学校、制服着用の全寮制の生活、景色や食事、習慣などなど。しかし、ちょっと立ち止まって考えてみましょう。われわれ外国人が、そうした国民性を「いかにもイギリス的」と感じるのはなぜ？

本書は、日常生活で気にも留めずに当たり前と知っていることを「そういうことだったのか」と考え直させてくれます。

361.5||Mot (N.T.)

⑦ 藤代幸一 著

『デューラーを読む：  
人と作品の謎をめぐって』

(法政大学出版局)

15世紀後半から16世紀前半のルネサンス期を生きたドイツにおける偉大な芸術の父、アルブレヒト・デューラー。宗教、芸術、哲学あらゆる学問から読み解ける要素のある作品が多いが、裏をかえせば全ての学問を以てしか、いや、以てでも読み解けないのがデューラーなのかもしれない。

書簡や旅日記から人物像を、デューラーの3大作品の一つである<メレンコリア I>の謎を、タイトル通り断片的に『デューラーを読む』ことができる本である。

723.34||Fuj (C.M.)



⑥ 佐藤亜紀 著

『醜聞の作法』

(講談社)

舞台は18世紀末のフランス・パリ。ある侯爵が金持ち好色爺と養女との縁談を企む。夫の奸計に心痛する侯爵夫人がそれをぶち壊すためにとった手段は、誹謗文を流布して醜聞（ゴシップ）を煽ること。

真実か否かはどうでもよい。面白いかそうでないか、信じ込ませるかそうでないかでホントかデタラメかを決めてしまう。大衆がゴシップを求めるのはいつの時代も同じ。ネット全盛の今、情報が氾濫し風評に踊らされる現代社会を諷刺しているよう。

ウワサがいつしか真実を作り上げてしまい、何が本当か分からなくなる事態を、書簡形式と歌劇の脚本のような洒落た文体で書いた一冊です。

913.6-Sat (Y.S.)

⑧ 小坂井敏晶 著

『人が人を裁くということ』

(岩波書店)

本書は「裁判員制度に対する日本と欧米との考え方の違い」、「冤罪事件はなぜ起きるのか」、「犯罪の正体と処罰の意味」の三部で構成され、パリ第8大学心理学部准教授で、フランス在住30年以上の国際感覚を備えた著者が裁くことの意味について考察を展開します。

日本の裁判員制度実施から2年が過ぎ、1万2千人が2000件の裁判に参加し、死刑5件が言い渡されました。布川事件や障害者郵便制度悪用事件など、検察の在り方が問われている今、是非読んでいただきたい一書です。

327.014||Koz (A.U.)